

「ハプティクス」特集号刊行にあたって Special issue on Haptics

矢野博明*, 岡嶋克典**, 仲谷正史***

Hiroaki Yano*, Katsunori Okajima**, Masashi Nakatani***

視覚や聴覚に続く新たなメディアとして体性感覚（皮膚感覚や力覚・深部感覚）が注目されています。そしてそれらの情報を提示するハプティクインタフェースの研究開発の現場では、ハードウェアとソフトウェアという技術的側面に留まらず、視聴覚ディスプレイなどとの連携や感性・錯覚を含む心理的生理的な側面の探求も進み、研究開発の裾野が着実に広がっています。また近年には非常に安価なハプティクデバイスが発売され、製品の触感デザインなど VR 以外のこれまではあまり関連がなかった多くの分野からもハプティクスは注目されるようになってきました。

このような社会的・学術的背景のなか、本学会では時代を先取りする形で、2006年に「触・力覚情報の処理と呈示」、2008年に「ハプティックインタラクション」という論文特集号を発刊しました。そして今回は、インタフェース技術に限らずハプティクス全般に関連する新たな提案、基礎技術や応用技術、要素技術やアプリケーション、コンテンツ、さらには新しい試みや考察についての報告など、幅広く論文を募集しました。その結果、ハプティクス関係の特集号としては過去最高の35件という論文投稿があり、うち24件（基礎14件、コンテンツ2件、総説3件、ショートペーパー5件）が採録され、論文特集号を発刊することができました。

エディタの当初の狙い通り、最新の成果が集まるとともに、これまでなかった総説論文やコンテンツ論文も採択されました。この分野の成熟を示すとともに、技術体系を俯瞰しつつ更なる高みへのステップアップのための指南書として価値ある特集号となったと思います。一方、不採択となった論文数も過去最多であったことも我々の今後の研究方針を考える上での重要な検討材料となります。特に心理学関係の研究や実験に関して実験の不備が指摘され、残念な結果となったケースが散見されました。本学会は工学系、心理学系等幅広い分野の研究者が多数在籍している学際的環境であり、さらに活発かつ濃密な交流を促す仕掛けが出来れば、相互の研究を加速するのではないか、という思いが生まれました。

本特集号の投稿〆切直後に東日本大震災が起きました。被災された方には心よりお見舞い申し上げますとともに、本特集に投稿いただきました著者の皆様、査読者の皆様、その他関係者の皆様には、大変な時期に迅速に対応いただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

* 筑波大学

** 横浜国立大学

*** 資生堂リサーチセンター

* University of Tsukuba

** Yokohama National University

*** Shiseido Research Center